

第24回夏期福音特別集会（第2回）

信仰の土台

―ガラテヤ書第2章15節～3章14節―

1977年8月20日（鹿沢）

小池辰雄

キリストの信による おねでとう 未完成の完成 義人なし一人だになし 律法に殺された
キリストと共に十字架された キリストの砕け キリスト我が内に在りて生きたもう 罪びと
のかしら どのように生きたか 我を見よ 義にして愛 キリストの無者 ペンテコステ 現
象即本体 私の信によって義人は生きる 生命を棄てるまで 信仰の土台 祈り

【ガラテヤ2】

15 我らは生^{うまれながら}来のユダヤ人にして罪人^{つみびと}なる異邦人にあらざれども、16 人の義とせらるるは律法^{おきて}の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。これ律法の行為に由らず、キリストを信ずる信仰に由りて義とせられん為なり。律法の行為によりては義とせらるる者、一人だになし。17 若しキリストに在りて義とせられんことを求めて、なお罪人^{つみびと}と認められなば、キリストは罪の役者^{えきしや}なるか、決して然らず。18 我もし前に毀^{こぼ}らしものを再び建てば、己みずから犯罪者たるを表す。19 我は神に生きんために、律法^{おきて}によりて律法に死にたり。20 我れキリストと偕に十字架せられたり。最早^{もはや}われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。21 我は神の恩恵^{めぐみ}を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然^{いたすら}なり。

【ガラテヤ3】

1 愚かなる哉^{かな}、ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前^{めのみえ}に顕^{あらわ}されたるに、誰^たが汝らを誑^{たぶら}かししぞ。2 我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法^{おきて}の行為に由るか、聴きて信じたるに由るか。3 汝らは斯くも愚^{おろか}なるか、御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか。4 斯程^{かほど}まで多くの苦難^{くるしみ}を受けしことは徒然^{いたすら}なるか、徒然にはあるまじ。5 然らば汝らに御霊を賜^{たま}いて汝らの中に能力^{ちから}ある業^{わざ}を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。6 録^{しる}して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。



7 されば知れ、信仰に由る者は、是^{これ}アブラハムの子なるを。8 聖書は神が異邦人を信仰に由りて義とし給うことを知りて、預^{あらか}じめ福音をアブラハムに伝えて言う『なんじに由りて、もろもろの国人は祝福せられん』と。9 この故に信仰による者は、信仰ありしアブラハムと共に祝福せらる。10 されど凡^{すべ}て律法の行為による者は詛^{のろい}の下にあり。録して『律法の書に記されたる凡ての事を常に行わぬ者はみな詛^{のろ}わるべし』とあればなり。11 律法に由りて神の前に義とせらるる事なきは明らかなり。『義人は信仰によりて生くべし』とあればなり。12 律法は信仰に由るにあらず、反つて『律法を行う者は之に由りて生くべし』と云えり。13 キリストは我等のために詛^{のろい}わるる者となりて律法の詛^{のろい}より我らを贖^{あがな}い出し給えり。録して『木に懸^かけらるる者は凡^{すべ}て詛^{のろ}わるべし』と云えばなり。14 これアブラハムの受けたる祝福のイエス・キリストによりて異邦人におよび、且^{かつ}われらが信仰に由りて約束の御霊を受けん為なり。

●キリストの信による

今日はガラテヤ書2章10節からですが、パウロがペテロとどうしたこうしたなんてことは省略します。今日の主題だけを、15節からいたします。

15 我^{うまれながら}らは生^{うまれながら}来のユダヤ人にして罪人なる異邦人にあらざれども、この場合の「罪人なる」というのは「神さまを信することのない」というような意味であります。

16 人の義とせらるるは律法^{おきて}の行為^{おこない}に由らず、唯^{ただ}キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。

ちよつと妙な言い方をしますが、これは原文によりますと、

「ただキリストの信仰による」

ということ。「唯キリストを信ずる信仰に由る」なんていう、ややこしい言い方ではなくて、

「キリストの信仰による」

という言い方がしてあります。この「キリストの」というのは、意識すれば、

「キリストを信ずる信仰、キリストへの信仰」

ということになるでしょうけれども。しかしながら、もうひとつは、「キリストの」というのが即ち、キリストは主格的な二格でして、キリストがサブジェクト、正に

「キリストの信仰による、キリストの信による」

という意味がむしろ根底に隠されている。ローマ書において、そういったことに気がついたのがカール・バルトですけれども、このガラテヤ書においても——ルターはそういうようには『ガラテヤ書の註解』では書いてないようですけれども——私は、むしろ「キリストの信仰」ということを言いたい。もちろん、それは「キリストを信ずる信仰」なんです



けれども、しかし、その奥にキリストの信というものが立たなかったならば、「キリストへの信仰」と言っても、本当の土台にはなっていない。

私は今日は『信仰の土台』と題しましたが、この信仰の土台はキリストが土台なので、我々の信仰が土台ではない。よくプロテスタントで

「信仰によって義とされる」

と言う。そういうときに、何か

「我々の信仰がサムシングであって、そして、それによって義とされる」

なんていう、ややもすると、そんな気持ちになっている。「我々の信仰」が何ものであるような、そういったような。そうすると、キリストが

「汝ら信仰うすき者よ」

というようなことを仰るものだから、

「これは大いに信仰を厚くしなくてはいかん、深くしなくてはならない。私はまだ

信仰がうすいものですから」

なんて、そういうことをよく言う。いつになったら、深くなるんですか。私はもし、「自分の信仰」をそういうように問われ、要求されるなら、私は御免こうむりたい。というのは、自分の信仰なんてものは当てにならないから。信仰すら私しない。信仰も私のものではない。信仰に絶する。絶信の信です。

パウロは散々、律法をしつかりやろうと思って、律法に忠実であった。即ち、それをもって「律法の義」としていた。それが間違っていたことに気がついた。気がついたというのは生まやさしい気がつき方ではない。キリストに気がつかされた。キリストにひっくり返されて、やつと目が覚めたんですから。

だから、人の義とされる、我々が神さまに義とされるのは、もちろん律法の行為ではない。我々が律法を行って、要するに道徳的に立派になったことでもって、義だなんて言えたはなしではない。その点では、いわゆる道徳の世界ではどうにもならん。

日本の歴史だって、そのことを証している。我々の若い時は、孔子や孟子の教え、忠孝ということとを散々教えられた。もちろん結構なことなんです。ある程度、もちろん大いに自らを鍛えることがあったわけです。けれども、それはあるところに来ると、どうにもその先には行けなくなる。日本が結局、単なる道徳ではどうにもならなかったということを経験が証明している。内村先生が明治36年に、

「ヨーロッパの文化文明を入れながら、キリスト教を本当に入れなかったことは、外国を学びながらダメだ。こんなことをしていたら、日本はそのうちに亡びるぞ」

と、日本がいつぱひっくり返ることを内村先生は預言している。その通りになってしまった。ヨーロッパ文化の根底にあるものを受けとらないで、表面の現象ばかりを受けとって、日本人は真似がうまいし器用だから、どんどん学び取るけれども。芸術の世界でもそうです。



やれ、なんののかんの言うけれども、では、ベートーベンをしてベートーベンたらしめているものは何か、バッハをしてバッハたらしめているものは何か、ダ・ビンチをしてダ・ビンチたらしめているものは何か。そのことを本当に掘り下げていない。それを単なる芸術上の巧みなことにしか考えてない。そうじゃない。結局、そこを押し進めていくというところ、宗教の世界になる。信仰の世界になる。しかし、信仰といっても、今度は、人間の側の信仰ばかり考えている。

●おねでうつ

私たちの信仰の土台はキリストの信にある。キリストの信をぬきにして、

「我々の信仰で義となる」

なんて、そんな我々の信仰なんて当てにならないものでもって、なぜ義となれるか。「キリストの信」というのは、「キリストへの信」と言っても、「キリストを信ずる」ことであって、我々の信仰を信ずるのではない。だから、

「キリスト・イエスを信ずる、信仰」

なんていう言い方をされると困るよ。「信ずる信仰」というと、何かこっち側のことになっちゃってしまう。口語訳に何とあるか知らんけれども、この文語訳はその点ではいかん。むしろ、せめて、「キリストへの信」、あるいは「キリストの信」とはつきり、ギリシア語の直訳でいった方がいい。「ただキリストの信仰による」とは、

「ただキリストの信による」

と言った方がいい。「キリストの信による」ということ。それでは、どうしたって、このキリストの信をいただかなければ、そのままいただかなければ、義とされないということが分かる。「キリストの信をそのままいただくことによつて」というのが一番わかる。

「キリストの信をそのままいただくことによつて義とされる」ということ。

私という魂は、根っこのない世界ではやりきれないんです。だから、私は「おめ(芽)でとう」と言わなくて、「おね(根)でとう」と言う。

「お根でとうございます」

と。種子はまっさきに根が出て、それから芽がふく。芽がふいてから根が出るのではない。だから、根っこは一番大事なんだ。種が破れれば、まずその破れは根に育っていく。現象界に頭を出す芽は後のなし。根の方が先です。キリストの信が根っこ、土台なんです。

だから、ガラテヤ書のこのところも、むしろルターはもうひとつ掘り下げて、

「キリストの信によつて、信を受けとることによつて義とされる」

と言わなくて。もっと簡単に言うて、

「キリストを受けとることによつて」



でいい。文字の上からは、「キリストへの信」で結構ですけども、奥はそういうことであるということ。」「キリストの信」をもうひとつひっくり返すと、「信なるキリスト」「信仰のキリスト」ということ。神さまを本当に信受している

「神信受のキリスト」

です。「キリストの信」は「信のキリスト」ということ。まあ、こんな言葉は言わなくてもいいですけども、掘り下げれば、そういうことになる。どこまでも、キリストという具體的な実存そのもの、これを受けとることによって義とされる。「義とされる」という言葉は、ユダヤ的な伝統の大事な概念で、また言葉であります。「義」という言葉自身でも、ちよつと表現しきれないような内容を私は感ずるんですけれども、これは仕方がない。

● 未完成の完成

16人の義とせらるるは律法の行為に由らず、唯^{ただ}キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。これ律法の行為に由らず、キリストを信ずる信仰に由りて義とせられん為なり。律法の行為によりては義とせらるる者、一人だになし。

この「由りて」という日本語は、二つとも「由りて」ですけども、これは「エック」と「デアイア」という二つの言い方をパウロはしている。「を通して」というのと、「その中から」ということ。「通す」方が「デアイア」です。「その中から」というのは「エック」、あるいは「アポ」という字もあります。そういったものを土台として、その中から、それによって信じ、義とされる。それが根つこととなって、私たちは義とされる。

「律法の行為によりては義とせらるる者、一人だになし」

「ノーマン」ということ。これは「ノット エニマン」という。「マン」といっても、これは本当は「サルクス」ですから「肉」という字です。

「いかなる生まれつきの人間もない」

ということ。生まれつきの人間は律法の行為によつては義とされない。生来の人間というものは、存在そのものは実は失われた存在、破れの器である。私が『無者キリスト』で書きました、あの「破れ」です。人間そのものは破れなんです。壊れものです。

ルターさんは

「聖書はかけらだ」

と言った。聖書は非常にもったいぶっているけれども、聖書はかけらだ。神さまの真理なんていうものは、これは盛りきれものではない。瓦のかけらみたいものだ。あれは愉快な言葉です。

あの大芸術家のミケランジェロが、どうしても完璧なものなんか作れない。最後の点が、プンクトは打てないです、地上の仕事は。みんな次の終末の完成を約束されている、そう



いう在り方です。ただし、未完成、完成という、未完成の中に完成の質をもつかということが大事なんです。破れの全さということ。

律法の行為によつては、即ち、律法を一生懸命で外側から守り、あるいは内側から守つたと思つても、本当の内ではないんだ。それは、守る主体が既に破れているからです。主体が既にダメだから。根っこを持つていないから。

だから、根っこのある主体にならなければ。「主体根」なんていう言葉はありませんけれども、我々自身の中に根っこが来なくてはいいかん。そういうところに来なければ、どんなに一生懸命で、いわゆる良心的にやろうが、それでもダメ。それは、あなた方、自分で実験してみても分かつているでしょ。人間の魂はどうしても、何か欠けている。

私は無教会にいました。無教会の信仰のすじは結構です。けれども、筋は結構なんだが、何か足りない。本当の確信が出てこない。だいたい力が出てきたような気がするけれども、何か欠けている。長いこと私は無教会の陣営の中にいたけれども。その何かというのは何だろう。

とにかく、生まれつきのままなる、肉なる存在が――パウロが「肉」というときは、即ち、生まれつきのままなる自然的な我々一人一人が「肉」で――これは自己中心なんです。エゴイズム、主我的なんです。今の教育がこのことをはつきり言わなければ、本当はダメなんです。そして、自主だの自由だのと言っているから。

「何が自主だ、何が自由だ」

と言いたくなる。本当に、今の若い青年が、浮いたものを読まないで、第一級のものに本当に食いついて、そういう魂になつてくれなければしょうがないよ。せつかく、この集会に来たら、特に若い青年諸君たちはこれを掴まないで、もつたいていなくてしょうがない。

そういう、生まれつきなる肉、ヘブライ語では「バーサール」という。その「サルクス」は何をしたって、本当のことにはいかなんだと。魂がちょうど蓄電池みたいで、本当の電源に来てないから、だんだん弱くなつてしまう。

●義人なし一人だになし

だから、パウロはそのことにはつきり分かつたものだから、

「律法の行為では一人だに義とされない」

と言つた。

「義人なし、一人だになし」

と詩篇14篇にも書いてある。

¹⁷若しキリストに在りて義とせられんことを求めて、なお罪人と認められな
ば、キリストは罪の役者^{えきしや}なるか、決して然らず。

「キリストに在りて」とある。



「エン・クリスト」

という、パウロが一番好きな言葉のひとつです。

「クリストの中にあつて」

ということ。中の世界が大事なんです。近頃は「中道」ということを少し言いだしてきたけれども。あれは本当の中道ではない。私の言う中道というのは、本当の真ん中に入っている中なんです。とにかく、その中に入つてなければ。

「クリストの中にあつて義とせられんことを求めて、なお罪びとと認められなば、

クリストは罪びとの役者なるか」

と妙なことが書いてある。クリストの中にあつても、残念ながら、人間は矛盾的存在で、それで、完全に成りきっているかというところ、そうはいかん。相変わらず、ダメなものがある。人間は、ルターも言っているとおりの、死にいたるまで罪びとにすぎない。けれども、クリストの中にあつては義人である。義とされている。「罪びと」と「義人」という二律背反の矛盾存在である。矛盾存在であるけれども、こちら(義人)が中心になっている。必ずこつち(罪びと)は次第に滅びていく。「三日月が必ず満月となる」と申し上げているとおり。だから、パウロは

なお罪人^{つみびと}と認められなば、クリストは罪の役者^{えきしや}なるか、決して然らず。18我

もし前に毀^{こぼ}ちしものを再び建てば、己み^{おの}ずから犯罪者^{あらわ}たるを表す。

即ち、もういっぺん「律法の義」なんていうものを立てたら、とんでもない、自分は神さまに対して罪を犯した者になると。

19我は神に生きんために、律法^{おきて}によりて律法に死にたり。

これは面白い言い方をしている。

「義者は人の大本^{たいほん}なり」

という言葉がある。これは淮南子^{えなんじ}の言葉です。「義者は」というのは「義は」ということです。義というものは人の大本である。これは福音的に言うならば、

「クリストの義が私たちの大本である」

「神の子の義は人の大本なり」

ということ。支那のものを読んでも、何でもすぐ福音の角度で読むと、もつと根本的な意味において掴めることになる。

●律法に殺された

だから、人間のこんな破れ器がいくらやったって、そんなことによつて義となりっこない。クリストの信を受けとつて、信なるクリストを受けとつて、そして、そのままその義をいただく。マルチン・ルターはこのことが分からなくて苦しんだ。ルターの註解をすこし読んでみましょうか。これは黒崎先生の訳ですけども、



「もし、問題が、いかにして我らは義とせられ、永遠の生命を得るのであるかにある場合においては、我らはパウロと共に、キリストを信する信仰によって我らは義とせられ、律法の行為や愛によって義とせられるあらずと答えるのである。これ我らが善行を排斥するがゆえにあらずして、救いの礎^{いかり}より絶ち離されざらんが為である。サタンは我らがこの礎より絶ち離されることを最も希望している。」

ルター自身も、さつき私が言ったような意味においては掘り下げていない。しかし、

「律法の行為や愛によって義とせられるにあらずと答えるのである」と。

まず、

「義とされるときに、問題を愛と一緒に考えてはかん。徹底的に信仰のみということころを、まず掘り下げていかななくてはいかん」

ということ、その点はルターもはっきりしている。

「彼は世の罪を負う神の小羊である。これを知るものは信仰のみであつて、愛ではない。ただ、愛は感謝となりて信仰に従ってくるのみである。その故に、罪と死に対する勝利、救い、永遠の生命は律法または律法の行為によって来たるにあらず、また、自由意志の力によりて来たるにあらず、ただ、主イエス・キリスト彼自身のみにより来たるのである。」

と、このルターの言葉ははっきり言っている。そのとおりです。

¹⁹ 我は神に生きんために、^{おきて}律法によりて律法に死にたり。

神に生きようと思うけれども、そこにひとつのギャップがあります。

「律法を行うものは永遠に生く」

と、旧約聖書にも書いてある。だから、ユダヤ人は律法を大いに拳々服膺して、一生懸命で律法を行っている。けれども、その行うというのが、内容がダメなんです、ユダヤ的な内容では。預言者といえども、それが本当にはできなかった。預言者たちがかなり近づいたのは、彼らが神の霊を受けたからです。いわゆる手放しでもって、律法の行為によって永遠の生命を得ようなんて、これは無理なんだ。本当に律法を行った者はキリストの他にいないんだから。キリストは本当に律法を行ったから、永遠の生命を持っている。いや、逆に、永遠の生命があるから行えたんです。

律法によって逆に律法に死なされた、殺された。パウロは律法に降参した。ということの後から分かった。始めは分からないですよ、律法で生きていると思った。ところが、本当は律法に対しては自分は無力であることを知った。

「これには負けてしまふ、死んだ」

という。また、

「律法に対して自分は死んだものとなった」

というような気持も持っているわけです。



●キリストと共に十字架された

それから、2章20節は新約聖書の中で一番大事な言葉の一つです。もうこの一節で福音が全部集約されていると言ってもいいくらいです。

²⁰我れキリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。

これは漢文ですが、

「我キリストと十字架に釘せられること同じうせり。然れども我なお生くるけれども我にあらざるなり。即ち、キリスト我に在りて而して生くるなり」

と。私は漢訳聖書を不思議に見つけて、旧約も全部持っています。今の支那語ではない。昔の漢文です。

これは何度読んでも常に新たに、いよいよ新たにいただく。この言葉にあきたら、お終いですよ。あなた方、御飯にあきるですか。御飯は死にいたるまであきない。本当の食物だから。これは魂の本当の食物だ。

「私はそんな言葉は知ってますよ」

なんて言ったら、そういう人は魂がダメになる。福音の真理というのは、

「2+2=4。ああ、そんなことは分かっています」

という真理ではない。常に新たに、その内容は限りなしという。説明しきれない。生涯を通して味わうよりか他に仕方がない。神の言葉は食らって生きる。聖書の言葉を食らわなかったらしょうがない。食べなくては。

「私はキリストと共に十字架せられた」

とパウロは言った。

「キリストは私たちのために十字架されました」

と、普通は思っている。それももちろん、それで結構なんだけれども。我々の罪の贖いをしてくださった。内村先生がよく

「十字架を端倪する」

と言われた。仰ぎ見る。しかし、十字架を端倪するだけでは困るんだよ、本当はね。内村先生は、ただ十字架をそれだけに思っているとは、私は言いませんよ。けれども、よくこういう言葉をお使いになりました。そうすると、エピソードが、亜流の人たちが、十字架はただそれだけだと思っている。内村先生なんていうものは、論理的に説明できる人ではない。

十字架をよく瞑想し、そして、そこにおつ倒れる。これは本当に我がために彼は十字架に掛かりたもうた。他人ごとではない。他人ごとに考えて、三人称的に考えているうちは、いつまでたっても、この世界に入れない。自分の直々の問題、一対一の問題としてとっ組みまない限り。過去二千年の前の十字架ではない。現実にはわが前に在りたもうところの霊の



十字架。私が、あなた方一人一人が、キリストを十字架につけました。悪いやつです。

あの当時のローマの官憲、学者、教師、祭司が寄ってたかつて、そして、民衆がこれに煽動されて、寄ってたかつてキリストを十字架に懸けた。弟子たちは直接にはそれに参与しなかったでしょう。けれども、弟子たちも自分の先生を、師を十字架に懸けた。キリストを十字架に懸けなかった人は実は一人もいなかった。

「万人のために我は己を棄てる」

というのが十字架です。我々が懸けたけれども、キリストは懸けられて架かったのではない。

「我は自ら棄てる」

と、ヨハネ伝に書いてあるとおり。本願の愛がそのことをした。我々の過ちを本願の愛が受けとった。我々の罪を本願の愛が受けとる。このどうにもならない我々を、私を、

「お前は どうにもならんだらう。そのどうにもならんお前を本当に自由自在な人にしてやるよ」

と。私はありがたくてしょうがない。無条件の世界だから。私の過去がどうであらうと、現在がどうであらうと、未来がどうであらうと、そんなことは問題じゃない。もう説明できない。

そういう十字架。だから、その十字架を瞑想しているうちに、十字架の中に入ってしまうわけです。パウロが

「我キリストと共に十字架せられたり」

と言うのはそのことなんです。

「私を贖ってくださいったあなたの中に、私は消え入ってしまいました。もう、私なんてものはありません」

と。この気合ならざる気合が出てくるまでは、本当の信の世界には入れない。

●キリストの碎け

いいですね。頭で聞いているうちは、いつまでたつてもダメですよ。全存在で、私の言葉の背後から来ている何ものかを受けとってくれなければ。この集会は、全存在でぶつかっていないければ。

「もう、こんな者は どうにもなりやがれ。もうすつ飛んでしまったんだ」

と。破れどころの騒ぎではない。破れ切ってしまった。キリストでもって、破れきり、碎けきってしまった。それが私が言っている「碎け」なんだ。キリストは、イザヤ書53章の

「我らの不義のために碎かれて我らに安き与う」

と。あの「碎け」を私はもってきて、「キリストの碎け」という言葉を中心にしたんです。

「魂の碎けたる者は」

と、詩篇51篇に出ているけれども、我々の魂の碎けなんてものは高が知れている。



「まだ私は砕かれませんが、どうも傲慢で困りますが」

なんて、いいよ、傲慢のまま。傲慢のまんまで、ここにぶつかってください。そうしたら、キリストがそいつを全部砕いてくださることに、気がつく。それだけのこと。自分が砕けるの砕けないのと、そんなことではないんです。こっち側のことではない。キリストが自ら本当に我々一人一人のために、

「お前は本当の砕けに來ないから、私が本当にそのようにして砕けたんだ」

と。私たちは生來の我に十字架の死を賜ったんです。それを「死」と言おうが、罪から本当に変えて無罪となった「無」と言おうが、言葉はどうでもいい。何も私は無という言葉にこだわっているのでも何でもありません。言葉というのは暗号だから、本当の世界なんて言葉でもって表せない。

そういう、「無」と言おうが、「死」と言おうが、いいです。とにかく、こんなものはすっ飛んでしまった。100%にキリストが本当に贖いきってしまった。どこに問題があるんですか、私たちに。問題が残るような、そんな十字架ではない。

「そういう十字架の受け方をキリスト教界が本当にしているか。「十字架、十字架」

と言っているが、その十字架が十字架されているではないか」

と言いたいくらいだ。「主の祈り」をしょっちゅう教会ではやっている。みんな暗唱しているけれども、いわゆるお題目的になってしまっている。だから、マルチン・ルターが

「主の祈りが十字架されている」

と言ってしまった。

●キリスト我が内に在りて生きたもう

私はドイツの教会で、ドイツ人は「主の祈り」をやっている時に、私は黙っているものだから、牧師が「なぜ言わないか？」と聞くから、

「言ったていいけれども、私はおうむ返しみたいなことは嫌いだ。自分の本当の祈りとしてそこに出てくるならば、主の祈りのただ一句でも出てくればそれでいい」

と、私は牧師に言いました。こっちは聖霊の権威があるから。

「あんなに聖書を大事にしたルター教会の会員が教会に聖書を持ってこないじゃないですか。教会にみな聖書と讃美歌が備えてある。それをみな借りて読んで、またそこに置いていく。何をやっているか」

と、私はそれを言った。そしたら、副牧師が

「プロフェーサー小池が、聖書はちゃんと自分の聖書を持ってこいと言った。あなた方、今度から聖書を持つてきなさい」

と皆に言ったが、相変わらず持つて来ないよ。もうダメだよ、ドイツも。どいつもこいつ



も(笑)。

まあ、申し訳ない、悪口ばかり言つて。ルターだの、キルケゴールやなんかの悪口に比べたら、私の悪口なんか大したことない。キリストだって、相当悪口を言いました、

「あの、狐に言え」

なんて。いわゆるキリスト教国も――それは隠れた素晴らしい信者ももちろんいます――大体においてどうかなつてしまっている。

「私はキリストと共に本当に十字架されてしまった。私は相変わらず生きている。けれども、私じゃないよ」

とパウロは言つた。人間パウロは肉をそなえている限り、死にいたるまで人間パウロにすぎない。けれども、

「本当に生きているのはもう自分ではない」

と言っているんです。

「キリスト我が内に在りて生きたもうなり」

と。何ですか、「キリスト我が内に在りて生きたもうなり」とは。御霊のキリストです。

「キリストの御霊が私の中に入って生きている」

即ち、本当に十字架されると、聖霊が必ずやつて来るということ。この中にはつきり書いてある。ガラテヤ書2章20節の前半に、十字架と聖霊は離すことができないことがはつきりされている。なぜ、このことに気がつかないか。十字架をいい加減にしているところのいわゆる霊的な信仰も、「十字架、十字架」と口ばかり言っているところの、本当に御霊を受けていない信仰と、どっちもダメです。パウロの構造をはつきり受けとってください。

「贖いという言葉を使つても、本当の十字架を捕まえているか」

というんだ。

● 罪びとのかしら

キリストの十字架の本当の贖いで、罪は贖罪されている。パウロがテモテ前書15章で

「私は罪びとのかしらだ」

と言いました。正直、パウロはいろいろな極限的な悪いことをしたから。キリストの信徒をとつ捕まえて牢屋にぶち込んだり、ステパノが石に打たれるのもよしとした、その張本人の一人だ。使徒行伝に書いてあるとおり。

「彼らは為すところを知らない」

と、石に打たれて死にながら、ステパノは

「彼らを赦してやってください」

と。彼はもう天界にキリストを見て、彼の魂は天界へ翔んでいった。第一の殉教者ステパノにパウロは後で本当に感謝したでしょう。「悪かった」と。



「我は罪びとの首なり」^{かしら}

とパウロは言いました。

「自分は一番悪い野郎だ」

と。内村先生もそう言った。私もそのような野郎です。けれども、「罪びとの首」と自分を言ってみたところでどうにもならん。

「罪びとの首」になつたのはキリストなんです。キリストが「罪びとの首」になつて十字架に懸かった。一切をキリストは引き受けてしまった。魂の問題で解決しないことは、この十字架にきたら一つもない。

「どうも、私はこうで、ああで……」

なんて、何をぬかすかと本当に言いたい。何が、「ああでこうで」だ。みんな十字架に懸かっているんだ。十字架につけられてしまつて、問題はみんなすつとんでいるじゃないか。みたまのキリストを受けてごらん。どんな窮地においても、どんな状況においても、どんな環境においても、それは必ず勝つていく。そこに天国がある。

内村先生も時々、火花を散らすようなことを言っている。しかし、先生はなぜ火花ばかり散らかして、本当に常燃の火にしなかったのか、そこが残念だ。

「それはお前たちがやるんだよ」

と、内村先生はその弟子たちに本当は課題を遺していた。聖霊の火花はパツパツと散らしていた。

「なぜ、それをお前たちは本当に火をつけないんだ」

と、天界の内村先生はそう言っているかも知れない。それを、無教会は相変わらず「十字架、十字架」でお終いになっている。

「環境にあらず、聖霊である。環境はいかに完全であるとも、信者をつくらない。

これに対して、聖霊は最も不完全なる環境のうちより信者をつくる」

と、これは内村先生の英文の訳です。内村先生はとにかく、聖霊の火花がちよこちよこ散っているんだよな。だから、先生はそういう魂だから力がある。けれども、御霊のことを本当にパウロの次元までなぜ押し進めなかったか。

「それはお前たちの仕事だよ」

と言つてないけれども、そうなんですよ。それを、内村鑑三先生記念講演会といつて、しよつちゅう十字架だけでいつている。また悪口になつてしまつたけれども。

●どのように生きたか

手島郁郎君と私がそこを前進したんだ。また、手島君は手島君らしいやり方をやった。私は私らしいやり方でいく。彼とはいろいろ人間的にも違うから。まあ、大集会をあの子たちはやっているよ。あの『生命の光』という雑誌を——手島君が亡くなったら、あれ



も無教会の流れだから――

「これを廃刊にしようか、どうしようか？」

と散々悩んでいた。手島先生の奥さんと吉村君あたりが私の所へ聞きにいらっしやった。

「あなた方、何を仰るか。手島さんは聖霊でもって生きていたんだろ。そうならば、

その雑誌は聖霊の働きの文字ならば、あなた方はそれを続けられないでどうするんだ」

と、私ははつきり言ったので、彼らはもうすっかり喜んで、おつ始めて、今はむしろ手島さんがいる時よりか盛んになっっているでしょ。ただし、その盛んの成り方は自らもつと反省してもらいたい。

「我れ最早生くるにあらず、キリスト我が中にありて生き給うなり」

と。即ち、

「御霊のキリスト我が中にありて生き給うなり」

ということ。パウロは「御霊の」と言わないで、ただ

「キリスト我が中に」

と仰いました。パウロにとつては、聖霊もキリストも神も、いつも一つなんです。分裂していない。「三位一体」という言葉があるが、本当にいつも一体になっている。三位一体をいわゆる神学的に分析して、何をぬかすかと私は言いたくなる。

なんか、神学者の頭はおかしいね。私も今度は「無の神学」を書くけれども、本当の神学は神学を嘲るから。本当は、神の真理は単なるロゴスでは言えないんです。ドラマチックなものですから。私は自分で書いて、自分で書くこと自身がもう既にひとつの矛盾だと思っくらしいです。

本当に第一級の人物は、キリストとお釈迦さんでしょ。キリストもお釈迦さんも、何も書かなかった。弟子たちが書いた。これは不立文字ふりゅうもんじです。一字も書きやしない。キリストはいっぺん地面の上にちよつと文字みたいなものを書いたね。何を書いたかわからない。彼自身が本当に活字ふみなんです。キリストこそ活ける文字です。

「汝らはキリストの書なり」

とパウロも言った。私たちは生涯そのものが文字なんです。書かなくていい。さすがに、カール・バルトさんは世界で最大の本を書いた。バルト全集なんて一生かかったって読めやしない。あれを書いたんだからね、バルトというやつは。エネルギーシユなやつだ。けれども、バルトは「教会教理学」というもの凄いの本を書いて、

「私はこんなことで天国に行こうとは思っていない。私はただキリストの罪の赦しによつて」

と言った。さすがに、これはバルトのほとんど死に近い時の言葉です。天国の門で問われることは、

「お前は何を書いたか？」



ではないんだ。

「どのように生きたか？」

と問われる。「どのように生きたか」ということは、誰も人は他の人を判断することはできません。これは神さまだけが評価なさる絶対の秘義です。「キリスト」のキの字も知らない人も天国へ行くでしょう。大いに聖書に通じている人が、

「どっこい、待ってくれ！」

と言われるでしょう。分かりますよ、どうか。

「何々教だから」

なんて、そんなレッテルの判断ではないですよ、神さまの判断は。大事なことは、

「我々は如何に生きるか、一日を本当に一生として生きているか？」

ということですよ。「一日一生」というのは内村先生の言葉だけれども。

●我を見よ

「キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

と。即ち、キリストとパウロとは、もう本当に十字架で一つ、聖霊で一つ。だから、そのようなパウロもペテロもヨハネも――使徒行伝を見てもらいなさい――

「我を見よ」

と言った。「私を見よ」とは

「わがうちなるキリストを見よ」

ということですよ。

身体の弱い人がいろいろいる。どうしたら治るんでしょうか。I君は極限状況にいて、このようなI君なんだ。I君は「我を見よ」と言えるわけだ。あなた方一人一人がそれだけの聖霊の権威を持たなければウソですよ。まだ、人間を相対的な判断をしているうちはダメ。その人の中に何が本当に生きているかということが見えてこなくては。

²⁰我れキリストと偕に十字架せられたり。^{もはや}最早われ生くるにあらず、キリス

ト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して
我がために己が身を捨て給いし神の子を信するに由りて生くるなり

とは即ち、

「今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を十字架に懸け

たまひし神の子を受けとるに由りて生きているのである」

ということ。前半をまたもうひとつ別な角度から言ったにすぎない。ガラテヤ書2章20節は、前半も後半も同じこと。

「今この肉体にあつてサルクスで生きているのは、私を救わんとして私のために己が身を十字架に懸けたまひしキリストを受けとつて生きているのである」



と。「私を愛して」とは「私を救わんとして」ということだよ。「愛する」というのは、可愛がるという意味ではない。福音的な「愛する」という言葉は、「救うと、助ける」ということ。「敵を愛する」とは

「敵を救い上げる」

ということ。これは聖霊ができるんだ。

「敵を愛するなんて、これは難しいなあ」

なんて、クリスチャンはみなそう思っている。御霊がないから、そんなことを思っている。敵は無いんです。敵なんてものは相手にならない。何をやろうと、どんなに向こうが強そうであろうと、びくともしない。これは聖霊だから。聖霊がビクビクしたりするような、そんな聖霊はどこにもありはしない。いいですか。特に、ご婦人に言うけれども、女性は弱き者ではないですよ、本当にその中に聖霊があつたならば。

あのヒットラーというのは悪い野郎だ。ユダヤ人を数百万も殺した。日本の戦争の犠牲も二百万ですか。あのユダヤ人の虐殺は大変な悪事だ。彼は地獄のどん底に行っているだろう。あのヒットラーにその面前で――女の人ですよ――

「あなたの政治は間違っています。そういう事はドイツのためになりません」

と言った。ヒットラーは怒って、あの女を殺してしまえと。使いがピストルを持って行った。その兵士はその婦人を撃とうとしたけれども、その婦人の神的な権威にうたれて撃てなかった。もちろん、殺したと言って、ウソを報告したんでしよう。

私なんか気の弱い野郎だよ。大体、小学校で学芸会やなにかで出されると、足が震えてしまう。唱歌の試験で立たせられると声が震えてしまう。そういう弱虫の泣き虫なんだ。今は別の涙をもっているけれども。

「私は生まれつき気が弱くて……」

なんて、あなた方は自分を弱いなんて決して思うことはない。どうぞ、御霊の世界で毅然としてください。この福音的な真理に対しては絶対に負けませんから。ただし、本当に福音的な正しいことには絶対に譲つてはいかん。

●義にして愛

パウロのこのガラテヤ書2章20節は、あなた方、座右に掲げて、自分で書いて置いたらいいですよ、何か他のものを掛けるよりも。そして、その文字を本当に化体していく。何でも化体することが大事なんです。

²¹我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然なり。

ルターは、ローマ書1章17節の

「神の義はその福音のうちに顕れる」



の言葉に躓いた。

「神の義は福音のうちに顕れるとは何のことだろうか？」

と。ルターには初め、「義」というのは審_さきの義_ぎしか分からなかった。神さまは義をもって我々を審_さきたもうから、

「さあ、私たちも大いに義にならなくてはいいかん」

と思つて、努力精進したわけだ。けれども、キリストは、義人キリストそれ自身を、キリストの義を――義は審_さく義ではなかった、与_よえる義であつた――我々にそっくりそのままくださるものであつた。十字架をもつて贖罪して、そこにくださるところの義であつた。だから、

「十字架によつて罪から贖_{あがな}われて、これを受けとる者は義とせられる」

とはそのこと。しかし、その「義とせられた」ところの内容は何かというと、聖霊になるんです。これを忘れてはいかん。そして、その義をくださるその行為そのものは何かというと、これは愛です。十字架の行為そのものは愛なんです。己が身を棄てるんだから。ピリピ書2章にあるとおりです。

「⁶即ち彼は神の貌_{かたち}にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんと思わず、

⁷反つて己を空しうし僕の貌をとりて人の如くなれり。⁸既に人の状_{さま}にて現れ、

己を卑_{ひく}うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順_{したが}い給えり。」(ピリピ2・

6～8)

これは本当に我々一人一人を救わんとするところの愛によつたのである。義と愛がまた離_{はな}れすることができない。義にして愛、愛にして義。義は縦の線、愛は横の線、十字架を表す。「神―キリスト―我」の縦の線が義。人を救つていくところの横の線は愛。十字架そのものが今度はそういう深い内容をもつ。

十字架の中には最後の晩餐的な内実も入ります。

「我が血を飲め、わが肉を食らえ」

と。けれども、一番大事な十字架の中心は贖罪であります。このことを忘れたらダメです。

「己に勝つは城を攻めるよりも難しい」

という。己に勝つは最大の勝利である。しかし、誰が本当に己に勝つたか。この自我に勝てたか。東西の宗教家がみなこの関門でもつて苦しんだ。そして、そこを突破せしめられた。法然、親鸞の信仰がまたそれでありました。法然がこう言っている。

「わしの信心も、善親(親鸞)が信心も一つである。信心に変わりがない。およそ信心が異なるといふのならば、自力の信にとつてのことであつて、他の場合には各人の智慧が異なるから、信もまた異なるのじゃ。が、他力の信心はこれとは違うぞ。それは仏から回向_{えしやう}された信であつて、

仏から回向された信。本願の信です。さつきから言っている、キリストの信なんです。仏



の方から回向された。還相の方だね。

我々が造作ではない。

我々が造り出した信仰ではありません。信そのものが如来から賜ったものである。法然や親鸞のこの信仰を、特に『歎異抄』の独訳を読んで、バルトさんが驚いた。「こんな素晴らしい信仰があったか」と。そのことが『ドグマテイク』(教理学)の脚注の所に書いてある。

我々が智慧や戒行の力で生み出したものではない。等しく如来より賜った信であるからには、みな一つであって更に差別はない。」

親鸞の信仰であろうと私の信仰であろうと同じだと。これは賜ったものだから。だから、信仰の土台というのは、仏教でもその本願の角度です。我々にとっても、キリストの信が、あの驚くべき信が、あの驚くべき義が、我々に義を賜る、信を賜る。それが「信ずる」ということなんだ、こつちから言えば。こつちから勝手に信じたのではない。ぶつ倒れてみたらば、そういうことになっていたというわけだ。それは、「ぶつ倒れる」というのは、さつきから申し上げている、「十字架を見てください」ということ。事実が語っているんだから。十字架という事実が語っている。そうしたら実は、ここにぶつ倒れていたことに気がつくんです。

「まだ私はなかなかぶつ倒れません」

ではありません。

「ここ(十字架)にもう既にぶつ倒れていました。ここに片づいていました。私は始末がついていました。克己はここでもって既にされていました。絶対他力の事態がそこにありました。ああ、何をか言わん」

と(異言)。そういう驚くべき世界に入ってしまう。パウロさんのどの手紙を見たって、そういう言葉がそこそこここに散らばっています。

●キリストの無者

第3章に行きましょう。

「愚かなる哉、^{かな}ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしままなるイエス・

キリスト、^{めづる}汝らの眼前に顕されたるに、^{たふ}誰が汝らを誑かししぞ。

「誰が汝らを誑かして、また元の律法の世界に戻ろうとするか」

と、パウロは憤慨している。「十字架につけられたままなるイエス」、そういう角度でギリシア語も書いてある。

「そういう真理にお前たちが従わないように、誰がたぶらかしたか」という言葉もある。この

「十字架につけられたままなるキリスト」



という真理、活きた真理、事実の真理。ヘブライ人にとって「真理」というのは観念ではない。事実をもつて裏付けられたものでなければ、「真理」と言わないんです。そういう事実をもつて裏付けられたことを本当に身に着けることを「道」という。私が「道」と言うときには、それだけの厚みをもった言葉です。

これは非常に著しいパウロの言葉ですね。キリストはもう復活して天界へ行ってしまうですよ。けれども、十字架のキリストは現にいつも私たちの眼前にあると同時に、活けるキリストが生きてありたもう。これを分けることがまたできない。十字架と聖霊が分けることができないように、十字架につけられたままなるキリストと、自在に生きてありたもうところの、遍在したもうところのキリストと、これを分けることができない。

十字架というどん底を通らない直接的な霊的なものはあぶないですよ。へたすると霊がサタンに切り替わる。十字架を土台としている信仰は絶対に傲慢にはならない。けれども、十字架が観念的であると、今度はパリサイになる。そして、自分は義人であると自己義認して、他の人を審くようなことをする。

「あれは真実でない」

とかね。藤井先生が

「偽りの信仰はいかん、真実であれ」

と言うと、今度は「真実、真実」と言つて、

「あれはどうも真実でない」

なんて言つて、人を裁いたりする。困つたもんだよな、言葉でもつて操られているものだから。結局、本当に「十字架される」という事と、本当に「御霊を受ける」という事が、これが本ものにならない限り、「異なる福音」になりますから。これが本ものでないと、「異なる福音」になる。私は無教会のことを「異なる福音」なんて言いたくはない。また、言おうとも思わないけれども、その危険性は大きいにある。

私はいつも平伏します、何もありません。私はキリストの無を賜っているから、

「私はキリストの無者であります。この無が同時に無限無量であります。十字架で

あると同時に聖霊であります」

と。どこがウソですか。

私がある方のために祈つて、その方の脊椎カリエスが治つた。その方が詳しくある先生にその事を伝えたら、その先生はガラテヤ書のこの言葉を使つて、

「何びとにたぶらかされたか」

と仰つた。雑誌の巻頭にその事を書いた。私は間接に攻撃をくらつた。私はなにも抗弁はしません。

「ただ、私はキリストに祈つた。それを治された人がウソと思うなら、どうぞお思ってください。私は自分のキリストへの信をつくがえすわけにはいきません」



と。その方はやっぱり、その某先生が間違っていたということに後で気がつかれた。しかし、随分苦しまれたですね、信頼している先生がそんな事を言うものだから。

私は神癒の現象を言っているのではない。

「本当の世界があるかないか」

本当の世界があれば、神さまの御意が働く時は、働くだけのものはなし。神さまが「ちょっと待て」と言えば、待つだけのものはなし。聞かれない祈りなんてものは一つもないんですよ。けれども、今聞かれるか、後で聞かれるか、いや死にいたるまで聞かれないか、知りませんよ。けれども、本当に祈っていることは必ず聞かれています。祈り以上に聞かれています。それだけの祈りをしてください。そうしたらもう、祈りの世界でエライ力が来ってしまうから。それがいわゆる聞かれようが聞かれまいが、そんなことはもうどうでもよくなってしまう。キリストだけが入ってくるから、後はいいようにしてください。だから、運命・環境に絶対に支配されない人になる。

「^せ為んかた尽くれども、望みを失わず。倒されても滅びず。これ常にイエスの死を負う。これイエスの生命の現れのためなり」

と、パウロが絶叫しているではないですか。

●ペンテコステ

²我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法の行為^{おきて おこない}に由るか、聴きて信じたるに由るか。

「律法の行為でもって御霊がきたかね、そうじゃなからう。この福音を本当に全存在をもって聞き入れて、そうして、受けとったことによるのではないか」

と。聞くも見ても同じことですよ。「観音」なんていう言葉があるとおり。音を観る。聖書の文字は読むのではない、これは聞くんですよ。聖書は文字の背後から語っているんだから。その響きを受けとらないで、聖書を読んだなんて、それは読んでいないのではない。聖書は聞いていなくて、言葉の奥の世界を。もうひとつ言えば、食らっていない。その中に自分を投げ込んでいない。もう、私は読んでいると、生命がすぐ来ってしまう。楽しくてしょうがない。電車の中でもどこでも、目をつぶれば、そこがもう深山幽谷です、雑音がいくら聞こえたって。肉の耳には聞こえたって、霊の耳にはそんなことは問題でなくなってしまう。

まあ、若い人に、直ぐそういう境地に入れと言ったって、それは無理かも知らんけれども。私だって、これは何十年かかっている。けれども、こんな小池なんてものは大したものではないですから、どうぞ、皆さんはどしどし前進していただきたい。今、二十代でこの信仰に入ったら、大変なことになるよ。今に、人が見ようと思っても、見えない人になってしまう。あの姿は何処にありやなんて、霊化^{れいか}してしまうよ(笑)。



もう他では得られないものを、あなた方は今、この破れ器をとおして、その世界に入りつつあるんです。魂の奥底から本当に震撼して――地震じゃないよ――霊震を起こしてもいい。

「聞きて、

この神の言葉、いや実に神の、キリストの行為、キリストの言行、キリストの実存そのものを聞いて

それを受けとったことによるか」

ということ。中心は、十字架と御霊のことです。

イエス・キリストが地上におられた時に、弟子たちはその間近かにいながら、聖霊が受けられなかった。なぜですか。十字架の贖いを通らなければ、聖霊は来ないんです。そのことはキリストはつきりわかってらっしゃる。

「お前たちは今に私に躓き、みんな散り散りになってしまふぞ。けれども、今度は本当に集める時が来る。その時は、私が言ったり為たりしたことが本当に分かるぞ。

十字架の贖いを通して、今度は聖霊を降だす。祈って待っている」

と。それで、ペンテコステで臨んできたではないですか。みんなは酒に酔うがごとく喜んでしまった。三千人も聖霊を受けた。けれども、聖霊を受けたと言って、上つ面な喜びをして脱落した者がたくさんいたに相違ない。内燃の、内側で燃える世界にもつていけないから。

明治の初年においても、そういうことがあった。明治6年、非常なリバイバルが起きた。内村先生もそこへ行った。「横浜バンド」で使徒行伝を語っているうちに、ほとんど日が連続して、始めは二日で終わるかと思つたところが、一ヶ月かかってしまった。それでリバイバルが起こつた。横浜バンドというのは、四人ばかりの霊的な宣教師が来たわけです。その総合的な集会で、みんなが酔うがごとくになった。それで聖霊に満たされたが、

「さあ、あの現象は一体、少しおかしいんじゃないか」

なんて、後で妙な自己批判をして、聖霊の火をみな消してしまった。そして、

「聖書の研究、研究」

と言いだした。ダメだよ。私は内村先生の聖書の研究を何も悪口言うわけではない。しかし、「聖書の研究」というようないゆる研究でもつて、この世界に入れません。研究がよかつたら、ギリシア語やヘブライ語ができる人がよく聖書が読めるか。決して然らず。日本語でたくさんだ。ギリシア語やヘブライ語の奥の神の根源語が読めるまではダメなんだ。日本語の奥の根源語が読めるまではダメなんだ、根源の神の言葉の響きを本当に受けとるようにならなくては。それは御霊の世界に來なくては。キリストの十字架を本当に受けとつて十字架されてごらん。パウロと同じに、

「私はもう生きていない。けれども、聖霊のキリストが私の中にかくも生きたもう。」



これをいかんせん」

ということになる。それからいくらかでも研究をしてください。本当の研究ができるから。

●現象即本体

³ 汝らは斯くも愚^{おろか}なるか、御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか。⁴ 斯程^{かほど}まで多くの苦難^{くるしみ}を受けしことは徒然^{いたずら}なるか、徒然にはあるまじ。

⁵ 然らば汝らに御霊^{たま}を賜いて汝らの中に能力^{ちから}ある業^{わざ}を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。

正に、「聴きて信じたるに由る」。「能力ある業」はどうして出てきたか。パウロもそのことをわけようと思つて、ローマに行きたかつた。これはローマ書の始めの方に書いてある。

「汝らの信仰を本当の神のキリストの力で固うせんために」

と。力は、なにも病いを癒すことばかりに現れるんじゃないですよ。どのような仕事をしようが、何をしてようが、そこに本当に聖霊の智慧と能力がはたらく。その多様性がなかったらいかんですよ。だから、皆さん一人一人には、その委ねられたことを為すのつぴきならない使命がある。天下一品なんだから、一人一人は。人真似なんかいらん。御霊を受けたら、

「賜物はそれぞれである」

とパウロが言っているとおりの、賜物が、いろいろなものがそこに現れてくる。神さまの働きが現れてくる。ピアノを弾く人なら、ピアノの弾き方がちがつてくる。算盤^{そろばん}をはじいている人なら、算盤のはじきが違つてくる。終いには算盤なんかいらぬ。聞いたら、どんなにどんな玉が動いていく。そうだよ、そういう凄いのがいるね。そんな世界です。

私なんかは、人生もう70歳を越してしまつたけれども、これからが私の本番だと思つてゐる。70位になると、大体みんなくたびれたような顔をしている。私は今までは序の口でこれからが本番なんだから。呑気なことを言っているんだけど。あなた方は20代でもつて、この世界に入つたら大変なことだよ。私はうらやましくてしょうがない。少し良すぎるな、お前たちは(笑)。まあ、遠慮しなくて、大いに良すぎてください。

神さまは、本当の世界は、内と外が相即してくるんです。現象即本体、本体即現象、みたいな相互関係、一如の関係になる。もう天も地もない。これはもう全部一如の世界です。霊界も相対界も一つになつてしまふ。過去も現在も未来も、みんなこの永遠の現在において捕まえている。

神の国は必ず来る。もう来ているんだから、しょうがないです、これ必ず。

「いつ、来るでしょうか？」

なんて、いつ来たつていいよ、そんなのは。それだけの、死んでも死なないところの、驚くべき現実の中に生きていかなかったら、どうするんですか。何が信仰ですか。だから、私



は「信仰」なんていう言葉は嫌いだよな、人を躓かせるから。

「まだ分からないものを、仕方がないから、信じておこう」

なんて、そんなものは信仰でも何でも無い。

「信は即ち現^{うつ}なり」

という、本当の現実なんです。言葉の災いとまで言いたいくらいです。

だから、禪宗では黙っている。沈黙の世界に入って坐禅なんか組む。あれも一つの現れ方です。なにも私は禅がいいと言っているのではないけれども。何でも、それぞれの善さというものが分かるんです、この本当の世界に入ると。浄土真宗と禅とは随分違いますよ。けれども、それをどっちも掴めるというのはどういうことですか。この福音の素晴らしきなんです。白隠を読んでも、道元を読んでも、楽しい。親鸞を読んでも、日蓮を読んでも。大変なやつだね、この小池というのは。それは、私がどうかではない。私の中のものがどうかなんです。私はもう、しょうがないやつなんだ。これは破れ器です。

●私の信によって義人は生きる

⁶ 録^{しる}して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。

これは有名な創世記15章5節の言葉です。アブラハムは旅に出かけて、

「⁴ エホバの言彼にのぞみて曰く、此者は爾^{なんじ}の嗣子^{よつぎ}となるべからず、汝の身より出る者、爾の嗣子となるべしと。

「エホバ」というのは、ヘブライ語で「ヤーヴェー」という文字が出てくると、

「神の名をみだりに上ぐべからず」

というので、これを畏れて「アドナイ」(わが主)という読み方をした。ドイツ語で「ヘル」とか、英語で「ロード」という。「わが主」という「アドナイ」という母音をこれにつけると、これが「エホバ」と読めるんです。

即ち、「実存者、実在者」と「わが主」を両方ひつくるめた言葉が「エホバ」という言葉だから、私は「エホバ」という言葉は味があるなと思って、この頃また「エホバ」に直してしまった。「ヤーヴェー」なんて、学問的にどうだっていいよ。「エホバ」という名は、怪我の功名^{こうみょう}、間違いの功名だ。

即ち、「ヤーヴェー」(実存者)という気持と「アドナイ」(わが主)という気持を両方含めて発音するならば「エホバ」(実存主)となる。いいじゃないか、「エホバ」というのは。言いやすいし。

アブラハムに子供が二通りあるが、そのことはパウロもガラテヤ書でそのことを言っています。

⁵ 斯てエホバ彼を外に携え出して言いたまいけるは天を望みて星を数え得るかを見よと。また彼に言いたまいけるは、汝の子孫は是のごとくなるべしと。



まだ本当の子供がいないのに、「私が与えようとしている子供」、イサクはまだない時のはなしだ。

6 アブラム、エホバを信ず。エホバこれを彼の義となしたまえり。」(創世記15・4～6)

アブラハムも妻のサラも、もう歳をとって子供ができそうにない。けれども、神さまが仰ったから、自分の経験や判断を超えて、「はいっ」と答えた。

「エホバを信ず」

というのは、

「エホバに対してアーメンと言いました」

ということ。「エムナー」という。この「アーメン」という言葉は

「^{まこと}誠とする、本当だとする」

こと。「誠」という言葉はいい言葉だね。「言が成る」と書く。神さまの言は成る。言が成るのが「誠」なんだ。言が成らないのは誠ではない。神さまを誠としました。そうしたらば、それを神さまは「^{よし}義」とした。

「信仰によって義とされる」

というのはここから始まっている。もう一つはハバクク書の言葉ですけれども。

アブラムが神に「アーメン」と言いましたら、エホバの神は、彼に「セデック」(義)を与えた。

「神を誠とする、信じる」

とは、

「己を^い否とする、神さまに^{しか}然りと言う」

こと。神さまに「然り」と言うことは、自分に「否」と言うこと。己を否定してかかる。自分なんか乗り越えて、神を神の故に「はいっ」と受けとる。

今、この「はい」という言葉が非常に少なくなつたね。今の若い人は、お父さんお母さんの言うことに「はいっ」と答えなければダメですよ、「うん」なんて言っているのでは。「うん、でも」なんて、デモ行進ばかりしていては。

「でも、こうじゃないですか」

なんて。無条件に「はいっ」と言つてごらん。逆に、お父さんお母さんを救つてしまうから。もつと、子供らしい、また男らしい、また本当に娘らしい、日本人が欲しいよね。私は明治の人間だから、もう歴史を通じてきているから、分かっているんだ。

それから、ハバクク書2章4節に、

「⁴視よ彼の心は高ぶりその中にありて直^{なお}からず、然れど^{ただ}義しき者はその信仰によりて活くべし。」(ハバクク2:4)

とある。

「義人は信仰によりて活くべし」



と。本当は、

「信仰によつて生くる者が義人」

なんです。「義人になれば、信仰によつて生きる」という意味ではない。

「本当の義人であるならば、必ずそれは信仰によつて生きている人なんだ。信仰によつて生きている人が義人と言われるのだ」

ということ。ところが、これはギリシア語の聖書によると、

「されど、義人はわが信によりて活く」

と書いてある。「わが信」とは神さまです。

「私（神）の信によつて義人は生きる」

と。これが私がさつき言った「キリストの信」と同じ角度の言葉で、このギリシア語の聖書には書いてあるから、私はびつくりした。「義人はわが信によつて活く」と、これが一番深い言葉です。さつき言った根つこの世界です。

「私（神）の信によつて生くる者が義人だよ。私の信を受けろ」

「神さまはこんな奴をそんなに信じてくださいますか。ああ、これはありがたい」

と言って、無条件に平伏して生きる。そこが義とされる。

「お前はそんなに俺を信じてくれたか」

と言って、友人が本当に友人を信じれば、信じられた友人は「俺は悪かった」と言って、その友人の信に応えるでしょう。

「愛の人は愛によつて活く」

と言ってもいいね。神・キリストの愛によつて活きる。同じことだよ、義と愛も。

●生命を棄てるまで

有名な話があるでしょ、大体、ご存じだと思うけれども。呉鳳^{ごほう}先生の話。儒教の先生です。

台湾の阿里山^{アリーシャン}の人たちに儒教を広めていた。ところが、台湾の土人は人の首狩りをするところが好きだった。

「それはしません」

と、大分そのことに皆は承服した。けれども、

「もう一人殺したら、私たちは人の首を取りませんから」

と、きかない。どうしてもきかないから、

「それでは一人だけ許してやろう。そしたら、もう絶対にやってはいかんぞ。明日の今頃、一人のシナ人が赤い衣を着てやってくる。その人がやって来たら、その首を取ってもらおう。そしたら、お前たちはもう絶対に人の首を斬つてはいかんぞ」

と。それで彼らは喜んでしまった、



「それでは、それで止すことにするから」

と。果たせるかな、翌日、赤い衣を着てやって来た人がある。その首をはねてしまった。見たらば、それが呉鳳先生であつた。

これがキリストの十字架の愛と質を同じうするところの、「主にのみ十字架を負わせまつり」（讃美歌331番）を実践した殉教者の一人です。彼はキリスト教ではなかったけれども、それだけの道を説いていた人です。それから、彼らは人の首を斬ることをやめた。己を本當に犠牲にしたわけだ。十字架の死と同じ質のものです。

私は中学校の時に、何もわからなくせに、

「どうあつても、耶蘇教なんてものは信するわけにいかない」

なんて思っていた。私の兄貴は一高時代に、内村鑑三先生の所に行つて、その信仰に入りました。今まで、なかなか勇ましい兄貴だつた。この勇ましがちようとパウロと同じだね、逆な勇ましきになつた。自分の兄貴を自分で言うのはおかしいけれども、終りの数年は本當に光っていた。もう終りには、キリストが白き衣を着てお迎えに来られた。

「お母さん、キリストがお迎えに来られたから、お先に失礼します」

と、腸チフスの病床でそのことを言つて先に往きました。この兄の死が、私には、死をもつてキリストの道を私に開いた。そこで、兄の持っていた本を開いたら、私はもうそのまゝ——内村先生の『宗教と現世』という本です、忘れることができません——撃たれてしまつて、それで私は内村先生の集会へ出かけて行つた。

本當の伝道は生命を棄てるまでできないんだ。生命を棄てることが本當の伝道です。何も殉教の死のことだけを私は言っているのではない。本當に生きていった人の死が必ず誰かの魂を新しく甦えらせる。そのような死を賭したような歩き方。この集会は私も棄身でもつてやっています。だから、いい加減な氣持で聞いてもらいたくないんです。

●信仰の土台

¹⁴これアブラハムの受けたる祝福のイエス・キリストによりて異邦人におよ

び、且われらが信仰に由りて約束の御霊を受けん為なり。

イエス・キリストの信はアブラハムどころの騒ぎではない、これは天下一品の信ですから。神さまに絶対服従したんだから、十字架の死にいたるまで。100%に。

「汝の御意を為させたまえ」

と言つて、挺身して100%に神の意志を行じた本當の僕、本當の神の子はイエス・キリストである。このキリストにおいて神が示現しておられるんだから、キリストに来ないでどこに神があるかと。

これは何も、パウロは聖書を書こうと思つて、書いているんじゃない。これが聖書になつただけのはなし。これはパウロの手紙だから。彼は御霊を受けとつたから、御霊のことを言つ



ている。私は聖霊のバプテスマを受けてから、

「ああ、こんなにもパウロもヨハネもペテロも聖霊のことを言っていたか」

と、聖書を見て私は驚いたんだ。今までどこを読んでいたかと思った。あなた方はこの集会から家に帰って、なるほどと思ってもらいたい。

「何を読んでいたか。頭で読んでいた。身体で読んでいなかった」

と。日蓮が

「法華経をからだで読め」

と言った。全存在で読めと。だから、私は身読しんどくという言葉が好きなんだ。さすがは日蓮さんですよ。

「頭で読んだってダメだ。ただ心で読んでもダメだ。お前はからだで読め」

と、佐渡に流される時に言った。何ごとも全存在的でなければウソものになります。今は、頭でつかちが多いから。学校も、「受験、受験。成績、成績」とばかり言っている。人間の価値が学校の成績でもって測られるかと言った。

私は試験なんかしたくない。私は3年生を教えているけれども、試験はしない。他の先生にやってもらっている。まあ、ちよつと虫がいい話です。大学でもそうです。試験が嫌いだから、レポートを書かせる。ちゃんと本を読んで勉強したレポートの方が面白いからね、読んでいて。読むのに骨が折れるけれども楽しい。何しろ私は形式的なことが嫌いだから。

そういうわけで、信仰の土台はキリストの信を、キリストそのものを受けとることが我々の信であつて、私たちの信仰そのものをサムシングとしない。「己の信」には絶とずるところに上から賜りたる信がくる。これは法然、親鸞の信仰と同角度の信仰です。だから、私はああいう一流の坊さんには本当に敬意を表する。楽しいよ、ああいうもの読んでいると。福音の世界でズーッと読めるから。もう、偽りでないものはみんな消化してしまうですよ。何でも。

私は、そういう意味では、何年でも生きたいね。そして、伝えたい。限度があるでしょうが、いつ限度か知らないけれども。とにかく、使命のある限り神さまは必ず置きたもうから。皆さんも存在即使命の生き方をしてください。何をしていても、そうなんです。本当に生きていれば。結果はどうでもいいよ、結果は。結果なんかは考える必要はない。神さまがいいようになさるから、本式に生きていけばいいんだよ。

皆さん、自分を何だと思っているんですか。間がぬけていていいんだよ。日本は「間」の芸術だ。「間抜け」という言葉があるけれども、間抜けが一番本当の生き方なんだ。間抜けになるといって、これは本当の人間になる。キリストが入ってくるから。もう何かね、こわばったような、しゃつちよこばったような、真実のような顔しているクリスチャンは嫌いだよ、偽善者で。

「偽善なる学者、パリサイ人よ」



とキリストは仰った。私の気合が分かりましたか。受け取りましたね。

● 祈り

祈ります。

主さまあなたは、己の熱心で一生懸命になっていたパウロを、神に於ける熱心に切り替えてやろう、これはただごとでないと、あなたは思われて、パウロをダマスコ途上でひっくり返されました。そうしたら、彼は目から鱗の如きものが落ちた。そして、彼は曠野に行つて、アラビヤの野に出て、そして深く断食祈禱をしたと思います。そして、彼はあなたの十字架が何であるか、御霊のあなたが何であるか、を本当に身をもって受けとつて立ち上がりました。

「人よりにあらず、人に由るにもあらず、ただあなたによつて示された」

と、彼は確信ならざる確信を賜つて、あなたの福音を僕となつて伝え始めました。当時の地中海の世界をくまなく歩かんとして、彼はあらゆる艱難に立ち向かい、これを突破して行きました。なんと素晴らしい実存でしょう。あなたのみ力です、あなたの智慧です、あなたのご栄光の現れです。

かくして、一人の人が本当にひっくり返ったときに、驚くべきことが始まるのです。ここに集まったところの兄弟姉妹たちは一人一人が天下一品につくられています。どうぞ、人に喜ばれんことにあらず、あなたが喜びたもうところの、そのような存在として、いよいよ進めさせてください。人の判断はどうでもいいです。私たちは、あなたが本当に「そうだ」と仰つてくださる生き方をしたいです。

そのようにして、この兄弟姉妹はパウロが伝えてくれたところの、ヨハネが伝えてくれたところの、ペテロが伝えてくれたところの、この使徒的信仰に直結して行きます。いわゆるカトリックでも、プロテスタントでもありません。使徒的信仰に直結して、主イエス・キリストさま、あなたにその角度から直結して、この御言を御霊をもって食らい、そして、いよいよ私たちの実存をあなたが鍛えてください。感謝いたします。

今、その土台となるところの、あなたの信の事態を受けとり奉りて感謝いたします。いよいよ私たちの中に、

「キリストと共に十字架せられたり、もはや生くるにあらず、キリストさま、御霊のキリストさまが私たちの一人一人の中に生きたもう」

と、本当にはらわたの底からこのことを感謝し、讃美しながら進んで行きます。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン

